

「夏のくれよん教室」 実施報告書

夏のくれよん教室 実行委員
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 大橋克俊

目次

1、概要.....	3
2、夏のくれよん教室を実施するにあたって.....	4
3、夏のくれよん教室プログラム.....	6
4、最後に.....	8
参加したサポーターの感想.....	10
活動風景.....	12

夏のくれよん教室報告書

1、概要

■ねらい

神戸に暮らす外国人児童生徒（主にニューカマー）と、神戸の大学に通う大学生及び大学院生が学習サポートを通じて交流することで、子どもたちの学力向上だけにとどまらず、相互理解を深め、双方が異なる背景をもった人々との共生を自らが体験し、学びあえる環境づくりを行う。

■課題

- ・外国人児童生徒の学力低下（特に日本語）
- ・外国人の孤独化
- ・あいまいな進路指導の現状
- ・大学生の他者理解、異文化理解の希薄化

■目的

- ・学校の授業が行われない夏休み期間を利用し、「夏休みの宿題」サポートを行うことで、子どもたちの課題遂行及び日本語能力、基礎学力向上をサポートする。
- ・人々が集まる場所づくりをすることで、外国人の子どもたち、保護者の孤独化を防ぐ。
- ・多文化共生都市「神戸」の大学に通う学生たちの他者理解、異文化理解に対する意識向上を目指す。

■内容

①学習支援（対象：子どもたち）

「夏休みの宿題」サポート

日本語能力向上のためのサポート

②交流支援

子どもたち同士の交流

大学生同士の交流

■実施期間

2009年8月 毎週木曜日（6日、13日、20日、27日）（計4回）

2部制：①9:30～12:00 ②13:00～16:00

■場所

神戸市立青少年会館

■後援

神戸大学大学院人間発達環境学研究科大学院 GP プロジェクト

「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」

2、夏のくれよん教室を実施するにあたって

■夏のくれよん教室実行委員会

夏のくれよん教室を実施するにあたって実行委員会を立ち上げた。メンバーは兵庫県の大学に通う大学生及び大学院生で組織された。実行委員を中心に夏のくれよん教室実施に関しての準備を進めた。

■サポーター

夏のくれよん教室において子ども達と共に活動してくれる大学生サポーター（以下サポーター）を募集した。実行委員の関係者や大学にポスターを掲示するなどしてサポーターを募集した。サポーターは計8人であった。

■子ども

夏のくれよん教室に参加する子ども達の募集を行った。具体的には神戸小学校、第二本山小学校に訪問し、先生方と直接お話をさせていただき募集用のチラシを配布していただいた。活動当日は現地集合ではなく学校に集合しサポーターが迎えに行くことや、子どもたちとサポーターがボランティア保険に加入するなど最低限のリスク管理を行った。参加申し込みのあったお子さんには、保険の説明書及び実施のしお리를送付した。

■オリエンテーション

夏のくれよん教室を実施する前に、サポーターへの概要説明及び事前学習を目的とし、オリエンテーションを開催した。ゲストに白秀珍さんを招き「日本に住んでいる外国人児童生徒の教育支援をめぐる現状」と題して講演をしていただいた。

夏のくれよん教室 オリエンテーション

日時：2009年7月31日（金）19:00～21:00

場所：神戸市青少年会館 5F 視聴覚室

プログラム

1. 「夏のくれよん教室」概要説明

2. ミニレクチャー

テーマ：日本に住んでいる外国人児童生徒の教育支援をめぐる現状

講師：白秀珍（ベクスジン）さん 甲南女子大学大学院 人文科学総合研究科 博士後期課程1年

プロフィール：大韓民国 晋州出身

2003年留学を目的に来日

園田女子大学で学位、甲南女子大学大学院 人文科学総合研究科にて修士を取得

研究テーマは外国人児童の教育に関して

大阪在住、二児の母

3. 「夏のくれよん教室」プログラム説明

4. 提出書類の説明及び記入

5. 自己紹介

6. 質疑応答

オリエンテーションに参加して サポーター 室田早紀

活動が始まる2週間程前に2時間のオリエンテーションが行われました。まず、簡単な「夏のくれよん教室」の説明があり、その後、ゲストスピーカー・白秀珍（ベク・スジン）さんの外国人児童生徒に関する基礎学習としてお話がありました。日本での外国籍児童生徒の現状・教育的な状況など、普段聞けないような貴重なお話を聞かせていただきました。普段の生活の中では知らなかった外国籍児童生徒の現状を知ることができ、また、スジンさんの実体験のお話を聞いた事はとても良かったと活動していく中で感じました。そして、子どものサポーターとしてどのようにすれば良いのか話してくださったので、初めて子どものサポートをする人にもわかりやすかったのではないかと思います。その後は、配布物の説明や活動の最後にするお楽しみ会の説明、ボランティア保険の説明などがあり、どのような流れで活動をしていくのかわかりやすかったです。また、自己紹介などがあり、子どもとサポーターという関わりだけでなく、サポーター同士のつながりも大切にされていて良かったと思いました。

3、夏のくれよん教室プログラム

夏のくれよん教室の活動は学習支援を主な活動内容とした。外国人の子どもたちであっても、日本の子どもたちと同じ宿題がだされているという現状や、日本語によるコミュニケーションには問題がなくても母国語以外で勉強することで理解がどうしても遅れてしまうという問題を踏まえて、特に子どもたちの夏休みの宿題をサポートすることを主に活動を行った。

9時半からスタートして、ひとコマ45分で午前・午後にそれぞれ2コマずつ勉強する時間を設けた。また、15分程度のレクリエーションの時間を設け、計画的に勉強を進めていくために子どもたちとどのように学習を進めるかの目標設定や、ドリル以外に感想文や日記といった内容までサポートできるように心がけた。子どもたちの集中力を維持させるために、毎時間どこまで進めるかの目標設定をし、それを目指して学習に取り組んだ。そして、目標に達したらスタンプを押してもらえするという、ご褒美を設けることで子どもたちの集中力を持続させる工夫を行った。

サポーターと子どもが円滑に活動できるように、自己紹介シートをサポーターおよび子どもたちに記入してもらい、それを毎回ホワイトボードに掲示した。

時間割

午前	9:00	集合
	9:30~10:15	1限
	15分休憩	
	10:30~11:15	2限
	15分休憩	
	11:30~12:00	レクリエーション
	12:00~13:00	昼休憩
午後	13:00~13:45	3限
	15分休憩	
	14:00~14:45	4限
	15分休憩	
	15:00~15:30	レクリエーション
	16:00	解散

子どもを担当して サポーター（実行委員）秋枝 徹

私は中学2年生の男の子を担当した。最初は何と話しかけても「何もやりたくない」「めんどくさい」などと言っていたが、時間が経つにつれて笑顔も増え、やる時には真剣にやるようになった。また、勉強を始めても10分も集中力が持たなかったのが、休憩時間に入っても勉強をやめなかったり、自ら進んで教科を選んで勉強を始めたり、英語を声に出して読んだり、出した宿題をちゃんとして来たりと、少しずつでも変わっていく様子は見ていて嬉しかった。また、子どもがやりたがらなかった教科も、時間をかけてやれば頑張るようになったので、焦らず子どもが分かるまでやっていくこと、勉強する目的

をはっきりと示しながら勉強への興味を引き出すことの必要性を感じた。それでも、4回という回数の中で子ども達の変化が目に見える形で現れたことで、この活動の意味はあったと思うし、私にとってもこの活動を通じて様々なことを感じる事ができたので良かったと思う。

子どもを担当して サポーター 檜木智子

最初は緊張もあり、話しかけると質問に答えてくれる程度であったが、回を重ねるごとに徐々に打ち解けていきジャースン君からも話しかけてくれるようになった。一番初めに自己紹介をしたとき、名前を覚える気がなさそうで、「来週になったら忘れているけど」と言っていたが、3回目に会ったときに少しメンバーの名前を覚えてくれていたことに驚いた。はじめの方は休み時間などお母さんやお兄ちゃんと話している印象が強かったが、メンバーのみんなや他の子どもとの交流も増えていったのでとても良かった。ジャースン君はとても勉強熱心で、休み時間になってもきりのいいところが来るまで勉強を続けていた。初めはもくもくと宿題をこなしており、間違いを指摘してもそこを直してすぐ次の問題に進んでいたが、回数を重ねるごとになぜその間違いをしたのか説明してくれるようになった。また、答えがわからないときにヒントを与えると最初の方はすぐに「わからない」と言っていたが、打ち解けてからは自分から思いついた回答を言ってくれるようになっていた。最後のお楽しみ会でジェスチャーゲームをした際に自分からチームの代表に名乗り出てくれたことがとても印象的だった。活動を楽しんでくれていたので嬉しかった。4回の活動を通してやっと仲良くなれた頃に活動が終わってしまったのがとても残念だったが、今回の活動を通して勉強を教える難しさを知ることが出来た。相手にわかりやすい説明の仕方や答えを導くヒントの与え方などとても勉強になった。

4、最後に

「夏のくれよん教室」 ふりかえりレポート

サポーター（実行委員） 尹 梨香

「夏のくれよん教室」が、全4回すべての日程を終え、無事修了をむかえました。

この活動は、日本語を母語としない多文化な背景を持つ児童生徒（小・中学生）を対象に「夏休みの宿題」および日本語学習のサポートを行うことを目的とし始まった大学生有志と、対象となる子どもたちによるものです。

夏のくれよん教室では、前述したような子どもたちのサポートはもちろんのこと、子どもたちと大学生を結ぶことで、サポートする側とされる側といった意識・枠組みを超えた他者理解や異文化理解を深め、「共に学ぶ」ことをさらなる目的と設定しました。

今回集まった大学生は、対象となる多文化な背景を持つ子供たちと直接触れ合った経験や、その他いわゆるボランティア活動経験のないメンバーがほとんどで、活動に対する興味や意欲がある中で、それぞれが不安や戸惑いも持ち合わせての参加になりました。よって、教室を本格的に開始するにあたって、その準備として、ミーティングや事前オリエンテーション時に外国人児童生徒に関する基礎学習を行うとともに、今回の活動の目的と向き合うことに重点を置きました。

そうすることで、各自が活動の主旨や必要性を認識し、本活動のキーポイントである「共に学ぶ」ことへの考えを深めたとともに、活動に対する姿勢にメンバー一同共通性を見出すことができたのではないかと思います。

準備段階を経て、週1回、全4回という決して多くない回数ではあったものの、教室では、子どもたちの性格や学習状況を捉え、それにあった宿題の進め方やコミュニケーションのとり方を試行錯誤するという様子がしばしば見受けられました。このような、子どもたちと一緒に過ごす時間をよりよいものへとすべく取り組む大学生の姿勢は、実に印象的でした。

また、この向上心や開拓心はほかでもない子どもたちの頑張る姿や子どもたちと関わりによって芽生えてきたものと言えます。

子どもたちは、眠い目をこすりながら1時間以上かけて電車でゆられて教室へと通い、「(大学生と)約束をしたから一日ずつ宿題をやる!」、「苦手だけど、ここまではやっていく!」と、自分のやる気を言動で示し、それを実行すべくとにかく一生懸命でした。

教室に参加するにあたって緊張からくる戸惑いが見受けられたものの、それぞれが大学生と一緒に設定した目標（約束）、それ以上のものを達成すべく頑張る姿に大学生側も魅せられたのだと思います。

保護者の方から寄せられたお便りからは、家庭内での子どもたちの変化、成長が綴られていました。家庭での学習時間が増えたと同時に、宿題に対する姿勢や学習意欲が高まっていることを、子どもたちと日常生活を共にする中で、実感されたようです。

また、家庭内で教室の話題が頻繁にあがり、「自分もあんなふうになりたい!」、「どうしたらいい高校、大学に行けるの?」、「大学に進学したいな!」と、子どもたちが自分の将来について考え、話をするようになった変化、成長にとっても感激されたそうです。

大学生との学習やその他のやりとりが、学習サポートだけでなく、学習意欲の向上さらには子どもたち

にとって自分の将来を描くきっかけになっていることに、私たち自身、活動を開始する前には想定していなかった本活動の新たな意義を感じさせられることとなりました。

そんな中、課題があるのも事実です。“持続的な活動”への発展がそのひとつとして挙げられるでしょう。というのも、多文化な背景をもつ子どもたちの学習は、当然のことながら日常的に行われるものです。よって、日本語が学習言語と確立されてないが故に学習に影響が及ぶことや、そうであるならばサポートも同様、単発的ではなく、持続的に行われるべきであると認識しています。

今回の活動は“夏休み期間の学習サポート”というものではあったものの、これを起源とし、課題やニーズを明確に捉え、また、可能性・実現性と向き合いながら開拓していければと考えています。

また、実行委員会が主催する活動にとどまらず、本活動に参加をした大学生一人一人が、それぞれの生活に教室での経験を持ち帰っての、大学生ならではの視点を大いに生かした新しい一歩に期待したいと思います。

最後に、この「夏のくれよん教室」が、たくさんの方々のご協力のもと、開催、無事終了に至りましたことをご報告させていただきます。

私たちを信じてお子様を教室へ送りだしてくださった保護者の皆様、終始サポートに徹していただいた神戸大学 HC センター職員の皆様、企画から活動中においてもお力を添えてくださいました各方面全ての方々、そして子どもたちに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

参加したサポーターの感想

私はボランティアというのをすること自体が初めての経験で最初は少し戸惑いながらのスタートでした。人に勉強をおしえるという点にあたって自分が理解できていない問題が多々あり子供達にあまりうまくおしえられなかったことが一番の心残りです。しかし、勉強以外の会話などで子供達が少しでも何か刺激をうけてクレヨン教室を終えてくれていたら幸いです。私自身もすべてが初めての経験でいろいろなことを学ぶきっかけになりました。今年の経験をまた来年に繋げていければと思います。貴重な経験ありがとうございました。 三木 亜沙子

夏のくれよん教室のサポーターとして参加して、初めは私に勉強を教えることができるのか、他のサポーターと仲良く活動できるのか不安でしたが、実際活動してみるとどのように自分がサポートすることができるのか、このような場合はどうすれば良いのか考えたり、スジンさんに聞いたりして活動することができ、子どもたちの勉強だけでなく、自分自身を見つめなおす良い機会になりました。子どもの数が少人数だったので、どうなるのかと思っていましたが、少人数だからこそ一人ひとりの児童生徒を見ることができ、気づくことも多かったと思います。最後の活動日にお楽しみ会をし、どのような形になるのかと思っていましたが、すごく自分自身楽しく、また子どもたちも楽しそうにしていたので、改めてこの活動に参加することができてよかったです。この活動が自分自身にプラスになり、今後に生かしていければ良いなと思います。室田早紀

私は最初この夏のくれよん教室に参加するまでボランティアなどの経験も全くありませんでした。その分自分に出来ることはあるのかと不安もあったけれど、実行委員をやっていくうちに自分にも出来るものがちゃんとあって、0だったものが少しずつ形になっていくのが目に見えるのがとても楽しかったです。子供が3人という不安なスタートだったけれど、実際教室が始まってみるとちゃんと1人1人と向き合えるという点ではよかったですのではないかなと感じました。4回の授業をしていく中で子ども同士の交流が増えていく姿や次第にやる気を見せてくれたりと、うれしくなる場面がたくさんありました。すべてが自分にとって初めてで、くれよん教室を通して貴重な経験をたくさんできました。新しい一面を見つけるという自分の中の目標もクリア出来たと思います。今回の問題点を見直し、これからまたこの教室やっていけたらよいなと思いました。 関山 美穂

夏のくれよん会を終えてみて、まず思うことは無事に終わって本当に良かったと思いました。なぜなら、何もかも1から自分達で企画・運営をするということが始めてだったので、「うまくいくのか?」、「これで大丈夫なのか?」と、心の中でずっと不安でした。しかし、最後のお楽しみ会の後の子供達の笑顔でその不安も安心に変わりました。自分達がやってきたことで、子供たちが笑顔を見せてくれることがとても嬉しかったです。この活動に参加してみて本当に良かったなあと心から思いました。そして、もう一度、夏のくれよん会のような活動を企画・運営したいです。井上大嗣

夏のくれよん教室が無事に終了したことにホッとしている。一ヶ月という短い期間であったが、内容の濃い時間を過ごせたと思う。この活動を通して、外国人児童が置かれている立場や、現状など今まで

知らなかったことが多くあることに驚かされた。そのような背景を踏まえたうえで、特に神戸という町でこのような活動ができたことは、非常に意味深いことだと思う。今回は参加してくれた子どもたちは3人であったが、需要はもっと多いはずである。この活動を一回きりで終わらせるのではなく、継続して進めていくことが重要であると感じた。また、外国人児童をサポートすることと同時に、この活動を通して私たちも、説明の仕方、声をかける内容やタイミングの難しさと言った多くのことを学べたと思う。子ども達とサポーターと両者にとって意味のある活動であったと思う。大橋 克俊

今回この企画に参加して、多くのことを学び、経験することができました。今まで、ボランティア活動に参加したことはなく、戸惑うこともありましたが、子ども達の真剣に取り組む姿勢や笑顔をみて、参加してよかったと心から思いました。また、日本に在住の外国人児童・生徒について今まで関心を持つことがなく、無知であったが、夏のくれよん教室を通して、在住の外国人児童・生徒は言語問題の他に、様々な悩みを抱えていることを知ることができたので、これを機にさらに学んでいけたらと思います。最後に、このような貴重な体験を支えてくださった方々に感謝するとともに、今後このような機会がありましたらまた参加したいと思います。安田 真由美

活動風景

